

2018年度 博士課程学位申請リサイタル

大久保理紗 ピアノリサイタル

2018年12月10日(月) 17:30 開場 18:00 開演

京都市立芸術大学 講堂

Program

J. S. バッハ／E. ペトリ

カンタータ《楽しき狩こそ我が悦び》BWV208 より〈羊は安らかに草を食み〉

J. S. Bach/ E. Petri: 'Schafe können sicher weiden' from Cantata "Was mir behagt, ist nur die muntre Jagd" BWV208

P. I. チャイコフスキー／M. プレトニョフ

演奏会用組曲《くるみ割り人形》

P. I. Tchaikovsky/ M. Pletnev: Concert Suite from the Ballet "The Nutcracker"

～休憩～

H. ベルリオーズ／F. リスト

幻想交響曲

H. Berlioz/ F. Liszt: Symphonie fantastique

Program notes

J. S. バッハ／E. ペトリ

カンタータ《楽しき狩こそ我が悦び》BWV208 より〈羊は安らかに草を食む〉

J. S. バッハ (1685-1750) の世俗カンタータ《楽しき狩こそ我が悦び》BWV208 は、ザクセン＝ヴァイセンフェルス公クリスティアンの誕生日祝賀用の音楽として作曲されたが、第9曲目に置かれた〈羊は安らかに草を食む〉は、このカンタータ中最も有名な作品と言ってもよいのではないだろうか。この穏やかな佳曲を、ドイツ生まれのピアニスト、エゴン・ペトリ (1861-1962) はピアノ・ソロ用に編曲した。ペトリは1900年代初頭から、コンサート・ピアニストとして活発に活動していたようであるが、その音楽観については、フェルッチョ・ブゾーニ (1866-1924) の影響がしばしば指摘される。彼はブゾーニと親しく交流しており、ブゾーニによるバッハの鍵盤作品の校訂にも携わったとされている。しかしながら、この〈羊は安らかに草を食む〉の編曲においては、ブゾーニの編曲作品にしばしばみられる (時にはバッハを超えてしまうような) 豪華な編曲手法の影響は感じられず、むしろ、バッハの音楽の持つ自然な美しさをそのまま鍵盤に持ち込んでいる。

(エゴン・ペトリについての記述は NAXOS のウェブサイト (Jonathan Summers 著) を典拠としている。 https://www.naxos.com/person/Egon_Petri_1202/1202.htm)

P. I. チャイコフスキー／M. プレトニョフ

演奏会用組曲《くるみ割り人形》

しばしば、名ピアニストというものは超絶技巧の編曲を手掛けたがるものだ。ミハイル・プレトニョフ (1957-) による演奏会用組曲《くるみ割り人形》もそのうちのひとつと言える。プレトニョフは1978年にチャイコフスキー国際音楽コンクールで優勝したのを機に、世界的な注目を集める存在となった。彼は自身の編曲した《くるみ割り人形》を既にチャイコフスキー国際音楽コンクールのステージで披露していたようだが、このような巨大なコンクールにおいて自作の編曲をプログラムに取り入れるあたりに、単なるピアニストにとどまらない、芸術家としての自信と自負が感じられる。

名ピアニストたちの編曲は運指の合理性と強く結びついている。彼らはピアノのテクニックを熟知しており、原曲の雰囲気や音響を決して壊さないように、かつ演奏効果が最大限発揮できるように、しかしピアニストの指に無理のないような計らいがなされているのである。それゆえに、楽譜だけを見れば演奏困難にも思えるのだが、実際に練習を始めると (当然難しいとはいえ) 弾けないこともない、という心持ちにさせられるのだから不思議なものである。

この演奏会用組曲《くるみ割り人形》は、〈行進曲〉、〈金平糖の精の踊り〉、〈タランテラ〉、〈間奏曲〉、〈トレパーク〉、〈中国の踊り〉、〈アンダンテ・マエストーゾ（パ・ド・ドゥ）〉の7曲から成る。演奏会用組曲の名にふさわしい、ピアノの魅力を余すところなく楽しめる作品となっている。

H. ベルリオーズ／F. リスト

幻想交響曲

ヘクトル・ベルリオーズ（1803-1869）とフランツ・リスト（1811-1886）の協力関係によって生まれた《幻想交響曲》ピアノ・スコア（1834）は、演奏機会に恵まれているとは言い難い。近年、リストの編曲作品が演奏される機会が増えてはいるものの、そこで取り上げられるのはたいてい演奏者の技巧を発揮できるような「ヴィルトゥオーソ」的な作品に限られており、リストのピアノ作品のごく一部を除いては、世のピアニストたちからほとんど関心を持たれていないのが現状である。本リサイタルはこの巨大な作品の演奏に挑み、「ヴィルトゥオーソ」としての音楽だけではない、リストの音楽の新たな側面に光を当てるという試みである。

まず、ベルリオーズの《幻想交響曲》は1830年に最初に書き上げられ、同年の12月に初演が行われた。これに立ち会ったリストは非常に感銘を受け、以来、ベルリオーズと深い親交を結ぶようになり、この無名だが才能ある作曲家のためにオーケストラ譜に先駆けてピアノ・スコアを作成し、作品の普及に努めたのである。ベルリオーズの《幻想交響曲》には彼の自伝的内容ともとれる詳細な物語が付随しており、観客に理解を促すために事前にその物語を印刷した標題（プログラム）が配布されていたという。

作品は全5楽章から構成される。ある若い芸術家が理想とする女性の姿がイデー・フィクス（固定楽想）となって現れる第1楽章〈夢、情熱〉に続き、第2楽章〈舞踏会〉では、舞踏会の喧騒や、あるいは美しい自然のなかに愛しい女性の姿を見つけ、芸術家の心はかき乱される。第3楽章〈野の風景〉では、牧人が牛追い唄を吹き交す穏やかな野原の情景のなかに一筋の希望を見出すが、その希望はたちまち暗い不安に沈んでしまう。第4楽章〈断頭台への行進〉において、芸術家は自らの愛が叶わないことを悟って死を選ぶ。阿片を飲むものの、致死量に足らなかったため彼は昏睡状態に陥る。その夢のなかで、芸術家は愛する女性を殺したとして死刑を言い渡され、断頭台へ連行されるのである。重たい足取りの行進曲が奏でられ、愛の名残のイデー・フィクスが一瞬芸術家の脳裏をよぎるが、ギロチンによって断ち切られてしまう。第5楽章〈サバトの夜の夢〉では、芸術家の葬式のためにサバト（悪魔崇拝の集会）に集まってきた化物たちに囲まれ、はやし立てられたり、嘲笑われたりしながら狂乱の宴が催される。芸術家の愛した女もサバトに現われるのだが、既にその気高さは失われており、グロテスクで下品な姿になり果てている。吊鐘が鳴り響き、聖歌であるディエス・イレがパロディー化され、この狂宴はますます異様な盛り上がりを見せる。

ベルリオーズは自ら『管弦楽法』という著書を執筆するほど、その管弦楽の扱いはこだわりがあったようであるが、リストはこれを見事に鍵盤上に移し替え、ピアノ演奏のなかにさらなる表現の可能性を見出そうとしている。

ベルリオーズのプログラムには3つの主要稿があるが、初演時に配布された第2稿を以下に掲載する。なお、すべてヴォルフガング・デームリング著、池上純一訳『ベルリオーズとその時代』（1993年 東京：西村書店）より引用を行った。

まえがき

作者のねらいは、ある芸術家が生その一生のうちに遭遇したさまざまな状況に含まれる音楽的な要素を展開してみせることにある。器楽によるドラマは言葉の助けを借りるわけにはいかないの、あらかじめそのプランを説明しておく必要がある。それゆえ以下のプログラム*は、オペラのなかで語られるテキストと同じく、音楽の各部分を紹介し、曲の性格と表現を説明するためのものであるとお考えいただきたい。

*演奏会場でのプログラムの配布は、この作品の演劇的なプランを聴衆に完全に理解してもらうために絶対不可欠である（ベルリオーズ注）。

第1楽章

夢——情熱

ある有名な作家が情念の迷走と呼んだ、あの内面の病を患うひとりの芸術家が、胸に想い描いてきた理想の女性像のあらゆる魅力を一身にそなえた女を見初め、身も世もなく彼女に夢中になる、という想定である。奇妙なことに、恋人の姿はきまってる楽想をともなって芸術家の心のなかに現われ、彼はその楽想に、彼女自身と同じく、多分に情熱的でありながら、気高くつつましやかな性格を感じる。

彼女の姿と、それを映した旋律は、二重のイデー・フィクスとして絶え間なく彼を追いまわす。最初のアレグロの主旋律が交響曲のすべての楽章に顔を出すのはそのためである。彼は、こうしたメランコリックな夢想状態から、わけもなく込み上げてくる歓喜の爆発による中断をはさんで感情の錯乱へと昇りつめ、憤激したり、嫉妬したり、やさしい気持に戻ったり、涙を流したり、宗教的な慰めを覚えたりする。これが、第1楽章のテーマである。

第2楽章

舞踏会

芸術家は実にさまざまな環境下に置かれ、ある時は饗宴の喧騒に包まれていたかと思うと、ある時は美しい自然のなかで瞑想にふける。しかし、街なかにも、野原へ出て、いとしい女の姿が目の前に現われ、彼の心に波風を立てる。

第3楽章

野の風景

ある日の夕方、彼が野原へ出ると、遠くからふたりの牧人が牛追い唄を歌い交わすのが聞こえてくる。この牧歌的な二重唱、周囲の情景、風にそよぐ樹々の心地よい葉ずれの音、最近になって芽生えた^ほ微かな希望。こうしたものがいっしょになって、彼の心に新鮮な安らぎが生まれ、気持がぱっと明るくなる。彼は孤独な自分をふり返り、ひとりぼっちの生活はもう願い下げにしたいと思う。……だが、もしも彼女に裏切られたら！……こうして希望と恐怖が入り混じり、幸福な想いは暗い予感に沈んでゆく。これがアダージョのテーマである。最後に、牧人のひとりがもう一度牛追い唄を歌う。しかし、もうひとりには応えない……遠くで雷鳴が聞こえる……孤独……静寂……

第4楽章

断頭台への行進

自分の愛が無視されたと確信した芸術家は、阿片をのむ。麻薬は彼を死にいたらしめるには弱過ぎ、彼は眠りに落ち、世にも恐ろしい幻影に包まれる。夢のなかで彼は自分の愛した女を殺し、判決を受け、断頭台へと引き立てられてゆき、自分自身の処刑に立ち会う。耳を聳せんばかりの大音響の爆発に続いて、重く鈍い足音が聞こえ、ある時は陰鬱で残忍な、またある時は華麗で厳粛な行進曲に合わせて行列が進む。行進曲が終わるところで、愛の名残を惜しむかのようにイデー・フィクスの最初の4小節が現われるが、必殺の一撃によって断ち切られる。

第5楽章

サバトの夜の夢

彼はサバトの場におり、彼を^{とむら}吊うために集まってきた亡霊や魔女など、ありとあらゆる怪物たちの身の毛もよだつような群れに囲まれている。奇怪な物音、うめき声、哄笑、遠くで上がる叫び声に別の声が応えているようだ。彼の愛した旋律がもう一度現われるが、気高くつましやかな調子は見ると影もない。それはもう陳腐で品のないグロテスクな踊りの旋律にすぎない。あれは彼女だ、彼女がサバトにやってきたのだ……彼女の到着に、歓喜の咆哮が上がる……彼女は悪魔の狂宴に加わる……^{とむら}吊いの鐘、^{デイエス・イレ}怒りの日*の滑稽なパロディー、サバトのロンド。サバトのロンドと怒りの日が、いっしょに鳴り響く。

*カトリック教会の死者を悼む儀式で歌われる賛歌（ベルリオーズ注）。